

Title	『初学記』に見られる「田真説話」の変容：二十四孝の研究
Sub Title	
Author	張, 滌非(Chō, Dekihi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.60- 74
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0060
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『初学記』に見られる「田真説話」の変容

——二十四孝の研究——

張 滌 非

一、はじめに

「田真説話」とは、三人兄弟の間における財産分与の話が要点となる孝行話であり、元時代の郭居敬が撰述した『二十四孝』という教訓書に収録されてから、広く世の中に知られるようになった。日本では『将門記』、『注好選』、『今昔物語集』、井原西鶴の『本朝二十不孝』などに影響を与えていると見られる。ただし、大舜、孟宗、王祥などの有名な孝子話と比べ、「田真説話」は親孝行の要素が薄く感じられるのが原因で、孝子説話の研究史において、あまり主なテーマとして取り上げられていなかった。

柳瀬喜代志氏の「『三荆』故事源流考」により、周景式撰『孝子伝』にある「荆樹連陰説話」と、南朝・梁の呉均撰『続齊諧記』にある「田真説話」は、ともに西晋・陸機の「豫章行」の「三荆」詩句と深く関わりがあることが分かった。拙稿「『三荆』の出自について——二十四孝の田真説話の研究——」（『三田國文』第六六号 二〇二二年一月）の考察により、「三荆」の典拠は「古上留田行」、「荆樹連陰説話」、「田真説

話」などではなく、周の太伯兄弟が離別を悲しむ「哀慕歌」であるという可能性を示した。また、拙稿「田真説話」の生成について——二十四孝の研究——（『藝文研究』第一二三号 二〇二二年六月）において、「田真説話」は呉均によつて、太伯兄弟の話、田儋兄弟の話、及び『異苑』にある「死桐復青」の話に基づいて作られたものであり、梁武帝に対する諷刺作であるという新たな説を提示した。

先行研究によると、「二十四孝」が成立する前に、「田真説話」はすでに唐・宋時代の類書に多く収録されているのである。今回は主に唐代の類書『初学記』に見られる「田真説話」の変容について考察してみたい。また、「荆樹連陰説話」は「田真説話」との関連性から、その唐代の類書にあるテキストも今回の考察の対象とした。

二、唐代の類書における「荆樹連陰説話」

『芸文類聚』とは初唐の勅撰類書である。武徳七年（六二四年）、唐の高祖帝李淵に命じられて、歐陽詢らが二、三年で完成したものであり、現存の類書中では『北堂書鈔』に次いで最

古だと言われた。宋の紹興十年（一一四〇年）版、明の嘉靖六年（一五二七年）版、万曆十五年（一五八七年）版、上海中華書局版複製十六冊（一九五九年）などがある。『初学記』とは唐代の勅撰類書である。玄宗帝に命じられて、徐堅らが開元十五年（七二七年）に撰したものである。記事の正確さにおいては『芸文類聚』に優る。明の嘉靖十年（一五三一年）刊の安国重校本、古香齋本、北京中華書局の活字本三冊（一九六二年刊）などがある。『芸文類聚』と『初学記』は、ともに日本国見在書目録に記され、寛平年間までに日本に将来されていたことが分かる。漢詩文等の漢文制作や奈良・平安時代の説話文学と関わりがあるだけではなく、和名類聚抄、色葉字類抄などの古辞書や、幼学指南抄などの類書にも幅広く影響を与えている。本稿はまず、①『芸文類聚』「卷八九・木部下・荆」と②『初学記』「卷十七・友悌第五・棟華 荆葉」の条に載る「荆樹連陰説話」の本文を取り上げたい。比較するために、下記の表一を作成した。本文の異なる部分は傍線を付して示す。

表一

① 芸文類聚		② 初学記	
周景式孝子伝曰		周景式孝子伝曰	
古有兄弟、忽欲分異		古有兄弟、意欲分異	
出門見三荊同株、接葉連陰		出見三荊同根、接葉連陰	
歎曰、木猶欣聚		歎曰、木猶欣聚	
況我而殊哉、還為雍和		況我而殊異哉、還為雍和	

表一から分かるように、『芸文類聚』に載る本文と比べると、『初学記』にある「荆樹連陰説話」の本文で変更したところは四ヶ所である。変更した部分の中で、文字の変更は、「忽欲」から「意欲」に、「同株」から「同根」に、二ヶ所が変わり、字の削除は、「出」門見」から「出見」にと一ヶ所が変わっている。字の増えたところでは、「殊哉」から「殊異哉」への一ヶ所である。

まず、字の変更の意義を考察してみたい。

「忽欲」とは「突然、急に思う」という意味合いがあり、「意欲」とは、「と思う」という意味である。「忽欲」から「意欲」に変更すると、文の意味は、「兄弟は理由無しに、急に分けようと思う」から、「兄弟は分けようと思う」に変わり、話の突飛さが消え、あらずじの展開が自然になったと思われる。

次に、「同株」と「同根」の違いを考えてみたい。

「三荊同株」は、陸機の「豫章行」の「三荊欵同株」詩句を踏まえた句である。梁の鍾嶸（四六九年？～五一八年？）は、文学評論書『詩品』の中で、陸機の詩作が陳思王曹植に源流を発すると説いている。陸機の詩句にある「同株」も、曹植の「七步詩」の「本自同根生」という詩句の影響を受け、自分の詩作に合せて、適宜に変形したものだと考えられる。「同根」は、曹植の詩によって、後に兄弟を指し示す言葉として定着していく。「同株」から「同根」に変化させたのは、「兄弟」の意味を更に強調するためと考えられる。

次に、字の増加と削除の意義を検討したい。

言葉の意味から見れば、「出」門見」と「出見」、「殊哉」と

「殊異哉」はニュアンスの違いはあるが、文の全体的な意味には大きな影響を与えるには至っていない。「出」門見」は「出見」と比べると、「門から」という経過する場所を示す程度であり、「殊」と「異」はほぼ同じ意味であり、重ねて使っているのは意味の強調にしか過ぎない。ただし、字が増加と削除をされた後は、①と比べ、②の文節の字数が変わる。

「周景式孝子伝曰」という所出を明示するための部分を除外し、本文の字数を比べると、①と②の文節の字数は以下となる。

- ①四、四、七、四、二、四、五、四
 ②四、四、六、四、二、四、六、四

①と②を比べれば、②のほうが更に四六調の韻文に相応しい体裁として整えられていることは明白である。ここで注意すべき点の一つある。『初学記』は、類書として辞書の性格を持ちながら、典拠を忠実に記録するのではなく、適宜に手を加えて文章を修正している点である。

『大唐新語』⁹⁾により、『初学記』の編集事情を窺うことができ、それには、皇子たちが作文するための模範となる文章が求められ、昔から伝わってきた説話の本文に適宜に手を加え、より合理的に修正したのであろうということも考えられる。柳瀬喜代志氏はそれについて、「これは初学の皇子たちが作文をする為に、最も便宜な手引書が要求され、それに答える形で、典故となる話、典故を略頌する対句、文学的表現の模範とすべき詩文を兼備する類書が編集されたという事情を伝えている」と述べている。¹⁰⁾ここには、『初学記』の編者たちが、読者である皇子たちを想定しながら編集した意図が見て取れる。

三、『初学記』における「田真説話」

次に、③『続齊諧記』¹¹⁾と④『初学記』「卷第十八・離別第七・「四鳥 三荊」の条」における「田真説話」の本文を比較するために下記の表二を作成した。

③の最後の「陸機詩云三荊欽同株」と、④の最初の「呉均続齊諧記曰」の部分は、附加説明の文であり、その比較は対象外とした。

また、『続齊諧記』の「田真説話」と比べ、『初学記』の「田真説話」の同等あるいは近い意味を表わす文を一単位として、主に新しく増加された部分と、削除された部分について、傍線を付して考察を行う。

表二

③ 続齊諧記		④ 初学記	
京兆田真、兄弟三人		京兆人田真、兄弟三人	
共議分財、生質皆平均		共分財各居	
惟堂前一株紫荆樹		堂前一株紫荆	
		華甚茂	
共議欲破三片、明日就截之		共議破為三、待明截之	
其樹即枯死、状如火然		忽一夕、樹即枯死	
真往見之、大驚、謂諸弟曰		真見之、驚謂諸弟曰	
樹本同株、聞將分析、所以顛碎		本同株、当分析便憔悴	
		況人兄弟孔懷、而可離異	

是人不如木也	是人不如樹木也
因悲不自勝、不復解樹。樹応声栄茂	
兄弟相感、合財宝	兄弟相感更合
遂為孝門、眞仕至大中大夫	

『初学記』の「田真説話」で削られている部分は、「生質皆平均」と、「状如_レ火然」のような写実的な描写、木が不思議に蘇ったという「樹応_レ声栄茂」の部分、そして最後の「合財宝」、「遂為孝門、眞仕至_二大中大夫」という後日譚の部分である。このような修正を受けて、『初学記』の「田真説話」には、六朝の志怪小説が備える怪異さと孝行の要素が薄れていくことになった。

次に、『初学記』の本文に新しい意味を付与した添加部分についての考察である。

④の傍線部で示したように、「各居」、「華甚茂」、「沉人兄弟孔懐、而可_二離異」という言葉は、③の『続齊諧記』には記されていない内容である。原文にない内容を添加することは、必ず説話に新しい要素を入れようという編者の意図が働いていると思われる。そこで、増加した部分の内容を主な対象として考察した。

まず、「各居」と、「沉人兄弟孔懐、而可_二離異」という言葉で示したように、③『続齊諧記』の話には記されていないが、④『初学記』では、兄弟が別れて別々に住もうとする。すなわち『初学記』には、兄弟が離別しようという要素が入っているのである。『続齊諧記』の話は、兄弟が財産を分けるとい

う内容のみの言及である。

また、兄弟の離別に対する『初学記』の編者の態度は、「沉人兄弟孔懐、而可_二離異」、「別れてもいいのか、いや、別れてはいけない」という批判的な態度となっている。話の最後の部分も、③『続齊諧記』のような、兄弟が財宝を合わせることでなく、兄弟が仲直りし、別居することを止めたという話になる。

④の『初学記』において分類された部立ては、「離別・四鳥三荆」の条であり、陸機の「豫章行」を意識して創られた類目である。ここで想起されることは、周の太伯兄弟の離別の話である。

次に、③『続齊諧記』には「華甚茂」という言葉もない。『大漢和辞典』によれば、「華」とは「花」のことであり、「華」は、特に木に咲いた花を指すということが分かる。「華甚茂」とは、「花が盛んに咲いている」様子を指し示している。木（紫荆樹）に花が咲いているということは、呉均の『続齊諧記』と、『五臣集注文選』の劉良注の「田真説話」には存在しない内容である（その他に、『磐溪廿四孝贊』に載る「紫荆再栄説話」は、呉均撰『続齊諧記』の「田真説話」と同文に近いので、「華甚茂」の一節もない）。

しかし、これまでに調べた範囲内では、「花」が出てくる例として、『珮玉集』の「田真説話」には「華葉美茂」、宋代の『太平御覽』卷四二一の「田真説話」には「花葉美茂」、同卷四八九の「田真説話」には「花葉茂異」、元代の胡炳文撰『純正蒙求』の「田真荆花説話」には「堂前荆花甚茂」、同じ元の

郭居敬撰と言われる『新刊全相二十四孝詩選』の「田真説話」には「花葉茂盛」があり、日本の『注好選』の「田祖は直を返す第九七」には、「四季に花を開く荆三莖在りて、一花は白、一花は赤、一花は紫なり」とある。『今昔物語集』卷十の「震旦三人兄弟、売家見荆枯、返直返住語第二〇」には、「四時二花榮テ面白キ事無限シ」、嵯峨本と渋川版『二十四孝』の「田真説話」には、「花もささみたれたる」、徳田武氏所蔵「加言二十四孝」(文化四年(一八〇七年))の「田真説話」に「花さき実なり」とある。須原屋版『二十四孝』の「田真説話」には「花さき實のり」、及び他の元和寛永、正保、明暦、寛文、天和、貞享、文政、天保年間に出版されたとする刊本及び写本系の書物のすべてに、「花が咲く」という要素が欠けることなく存在している⁽²³⁾。そこで、その「花」の由来及び意義が重要であると推測し、考察を重ねてみた。

四、「花」の意味

「花」を調べるための一つの手掛かりとなるのは、④『初学記』の「田真説話」の本文に新しく添加されているもう一ヶ所の内容「況人兄弟孔懐、而可_レ離異」の文中にある「兄弟孔懐」という言葉である。この言葉は『初学記』の「荆樹連陰説話」と同じ類目に記される「棣華」の条に見られる⁽²⁴⁾。前文の考察で分かるように、「華」は「花」に通じ、「棣華」とは、「棠棣の花」を指すのである。この条の初出の毛詩とは、『詩経』(周詩)の別名である。『詩経』でその全文を引用したい。

常棣之華	鄂不韡韡	常棣の華	鄂ぞ韡韡たらざらんや
凡今之人	莫如兄弟	(常棣の華	鄂ぞ韡韡たらざらんや)
	(凡そ今の人	兄弟に如くは莫し)	
死喪之威	兄弟孔懐	兄弟孔だ懐ふ	
	(死喪の威れにも	兄弟 孔だ懐ふ)	
原隰裒矣	兄弟求矣	兄弟 求む	
	(原隰 裒すにも	兄弟 求む)	
脊令在原	兄弟急難	兄弟 難に急く	
	(脊令 原に在り	兄弟 難に急く)	
每有良朋	況也永歎	況も永歎す	
	(毎に良朋有り	況も永歎す)	
兄弟鬩于牆	外禦其務	外 其の務りを禦む	
	(兄弟 牆に鬩ひ	外 其の務りを禦む)	
每有良朋	烝也無戎	烝ち戎くる無からんや	
	(毎に良朋有り	烝ち戎くる無からんや)	
喪乱既平	既安且寧	既に安んじ且つ寧まれり	
	(喪乱既に平らぎ	既に安んじ且つ寧まれり)	
雖有兄弟	不如友生	友生に如かざらんや	
	(雖に兄弟有り	友生に如かざらんや)	
儋爾簠豆	飲酒之飲	飲酒して之れ飲かん	
	(爾の簠豆を儋ね	飲酒して之れ飲かん)	
兄弟既具	和樂且孺	和樂し且つ孺しまん	
	(兄弟 既に具ひ	和樂し且つ孺しまん)	

妻子好合 如鼓瑟琴

(妻子好く合し 瑟琴を鼓くが如し)

兄弟既翕 和樂且湛

(兄弟 既に翕ひ 和樂し且つ湛しまん)

宜爾室家 樂爾妻帑

(爾の室家に宜しく 爾の妻帑を楽しめよ)

是究是圖

亶其然乎 (是に究め是に図り 亶に其れ然しからん)

〔余説〕《毛序》常棣は、兄弟を燕するなり。(略)《集伝》此れ兄弟を燕するの樂歌。詩意については、目加田誠は「常棣の花の咲き溢れるをもつて、兄弟が心を一にして榮えてゆくさまをいい起こす(略)」と論じ(略)

目加田誠氏の説明で分かるように、常棣の花は、兄弟和睦の象徴である。『詩経』は中国で最も古い詩集であり、「常棣」も、またその中で「兄弟和睦」を歌った歌として有名である。

『初学記』の編者は、「田真説話」に「華甚茂」と「兄弟孔懷」を添加することによって、「兄弟和睦」という要素を入れようとした痕跡が窺える。

『初学記』の「卷十七友悌」の類目に、「棣華」は、「荆樹連陰説話」を表わす「荆葉」の対句として並べられ、そして「卷十八離別」の類目に進むと、「田真説話」に、「兄弟和睦」要素が添加されるという変化が起こる。しかも『初学記』は適宜に本文を修正することもあり、『初学記』の編者は他の資料を参照したのではなく、『初学記』を編集しつつ、その改作を行った可能性があると考えられる。改作する理由としては、『初学

記』の読者である皇子たちを意識しているのではないかと思われる。

周景式撰『孝子伝』の「荆樹連陰説話」と呉均撰『続齊諧記』の「田真説話」は、陸機の「豫章行」と深く関わっていることはすでに述べた。また、拙稿「三荆」の出自について二十四孝の田真説話の研究」での考察のように、陸機の「豫章行」の「三荆」が基づいた典拠は、周の太伯兄弟の話だと考えられる。

その話の中で、太伯と仲雍は父の胸中を推し測って自ら家督相続の権利を弟の季歴に譲った。この二人の行動は親孝行の面から見れば徳高く、極めて尊い行為ではあるが、長幼に序ありという儒教精神を重んじ、長子が家督相続をするという伝統のある中国で、特に国の盛衰にも関わる皇子たちの教育において、これは扱い難い素材であるとしか言えない。

一方、太伯兄弟の子孫は、中国歴史上、八百年近い周王朝を開いた人物であり、太伯兄弟も徳の高い人物として、司馬遷の『史記』「世家」の最初に記載されている。その史実は容易に抹殺できない。太伯兄弟は聖人と言われ、その行動に対する批判は不可能に近い。また、陸機の「豫章行」も、詩集から消去することは不可能である。陸機は西晋の文壇を代表する一人であり、駢文対句を重んじる詩風を開いた人物とも言われている。彼に対する評価は、『文心彫龍』という文学評論書を初め、数多の記録に確実に存在している。その「豫章行」も中国の南朝・梁の太子蕭統(五〇一年〜五三一年)が編纂した『文選』に採録され、「三荆」という言葉は、梁朝の幕臣たち及び

後の時代の詩人たちの詩文にも引用され、その一連の資料をすべて抹消することも不可能であるといえる。

仮説ではあるが、李善（六三〇年？～六九〇年）が、唐の高宗帝李治に進呈した文選注に書かれている「古上留田行」、唐の開元年間（七一八年）に、朝廷に進呈された『五臣集注文選』のなかで、劉良注によって書かれた「田真説話」、そして『初学記』（唐・開元十五年～十六年～七二七年～七二八年）の、「田真説話」の改作などの事情を見れば、陸機の「三荆」典拠に対しての判断を間違ったというよりは、六三〇年以降に唐の朝廷に仕える文人集団が、意図的に「三荆」の典拠を入れ替え、補完作業を行ったのではないかと考えられる。

初唐の楊炯（六五〇年～六九三年頃）は、「従弟去盈墓志銘」の中で、「三荆」を使って、従弟の死を悼んでいる。「三荆揺落、五都悲涼。痛門戸之無主、悼人琴之両亡。」（『楊盈川集』「卷九・墓志」）。ここでの「三荆」は、兄弟の永久の離別を悲しむ意として使われた。この墓志銘を作った年代は、その記述中の「以上元三年（六七六年）五月二十二日歿于京師勝業里（略）至儀鳳四年（六七九年）十二月二日歸葬於華陰之某原」により、六七六年五月から六七九年十二月までの間と考えられる。そして注意すべき点は、この墓志銘は親族を哀悼する文であり、朝廷に進呈した正式な文書ではないことである。

もう一首の全文には、「三荆」という言葉はないが、興味を引く詩作として、唐の詩人李白（七〇一年～七六二年）の「上留田行」がある。

『全唐詩』「卷一六二・李白・上留田行」

行至上留田（行きて上留田に至れば）

孤墳何ぞ崢嶸（孤墳何ぞ崢嶸たる）

積此萬古恨（此の萬古の恨みを積み）

春草不復生（春草また生ぜず）

悲風四辺來（悲風四辺より來たり）

腸斷白楊聲（腸斷白楊の聲）

借問誰家地（借問す誰が家の地ぞ）

埋沒高里塋（埋沒す高里の塋）

古老向余言是上留田

（古老余に向かつて言ふ言これ上留田と）

蓬科馬鬣今已平（蓬科馬鬣今すでに平らかなり）

昔之弟死兄不葬（昔これ弟死して兄葬らず）

他人於此舉銘旌（他人此に於いて銘旌を挙げ）

一鳥死 百鳥鳴（一鳥死して 百鳥鳴く）

一獸走 百獸驚（一獸走りて 百獸驚く）

桓山之禽別離苦（桓山の禽別離の苦しむ）

欲去廻翔不能征（去らんと欲して廻翔征くこと能はず）

田氏倉卒骨肉分（田氏倉卒骨肉分かれ）

青天白日摧紫荆（青天白日紫荆を摧く）

交柯之木本同形（交柯の木も同形）

東枝顛頽西枝榮（東枝顛頽西枝榮）

無心之物尚如此（無心の物尚ほ此くの如く）

參商胡乃尋天兵（參商胡ぞ乃ち天兵を尋ねん）

孤竹延陵

（孤竹延陵）

讓国揚名 (国を讓つて名を揚ぐ)

高風緬邈 (高風緬邈)

頽波激清 (頽波清に激す)

尺布之謠 (尺布の謠)

塞耳不能聽 (耳を塞ぎて聴くこと能はず)

詩人李白が、これを詩作した意図については、すでに数多くの先行研究³⁴⁾によって議論されている。この詩作の時代背景についての憶測は控えたい。ただし、この詩作の内容については、これまでに調べた「三荆」典拠と関係のある資料とは、何らかの形で関わりがある。具体的な内容は、詩文の傍線部と注釈の資料を参照されたい。

また、この詩作の最後に取り上げられた四つの典拠(参商・孤竹・延陵・尺布之謠)は、国を讓るかどうかの「讓国」に関わりがあり、皇族の兄弟の話であることも、考えさせられるところである。

「参商」(春秋左氏伝³⁵⁾「三・昭公元年」に所出)は、中国上古時代の五帝の一人と言われる高辛氏の息子の兄弟不和についての話である。「孤竹」(史記³⁶⁾「卷六一・伯夷列伝第一」に所出)は、孤竹国の伯夷・叔齊兄弟についての話であり、「延陵」(史記³⁷⁾「卷三二・呉太伯世家第一」に所出)は、春秋時代の呉王の息子、季札兄弟についての話で、いずれも兄弟が互いに国を讓る話である。「尺布之謠」(史記³⁸⁾「卷一一八・淮南衡山列伝第五八」に所出)は、淮南王劉安が謀反を起こし、漢武帝に誅される話である。特に伯夷と季札については、何らかの形で太伯兄弟の話に関わっているように思われる³⁹⁾。

李白の「上留田行」の最後の一句「塞_レ耳不能_レ聽」は、ただ「尺布之謠」という歌を聞き忍ぶことを指すのか、あるいは他の意味を暗示しているのか。これは李白が長安に出仕しようとした折、その周辺にいる宮廷官僚との関係、及びこの「上留田行」の創作年代が明らかでない以上、判断できない。

唐代における「三荆」の典拠についての改作事情を見ると、三つの段階に分けられる。一、李善(六三〇年頃～六九〇年)の『文選注』に書いてある「古上留田行」。二、劉良の『五臣集注文選』(開元年間(七一八年))に書かれた「田真説話」。三、『初学記』(開元十五年～十六年(七二七年～七二八年))に載せられた「田真説話」である。

一は、「三荆」典拠を太伯兄弟の話から民間の兄弟不和の話に変える。二は、兄弟不和の話から兄弟和睦の要を説く「田真説話」に変える。三は、更に「田真説話」に、兄弟和睦を象徴する花の要素を添加した。特に一と二・三は全く内容の相反する話となる。改作を行った文人たちの前後の態度が変わった理由は、どこにあるのか、更に考察を深めて推測してみたい。

「田真説話」の資料を調べると、元・胡炳文(一二五〇年～一三三三年)撰「純正蒙求」には、「曹植豆萁・田真荆花」の条に続いて、「阿豺竹箭・玄宗棣華」の条が並べられている。その「玄宗棣華」⁴⁰⁾の話からは、二つの点を読み取れる。

一つは、宮中に「花萼相輝」という楼を設置することを命ずるのは玄宗帝である。その楼名に含まれる意味は、「棣萼宴兄弟」であり、兄弟和睦を唱える『詩経』の「常棣」に由来する。二つ目は、このことは後に、玄宗帝の性格が「敦睦」であ

り、兄弟友愛の情を賞賛する名目となった。

更に、「花萼相輝之樓」について調べると、『唐書』と『旧唐書』(42)の中で、次のような内容が確認できた。

睿宗帝が初めて皇位についた時、嫡長子の李憲を皇太子に立てた。後に政変が起こり、女帝武則天に皇位を譲り、李憲も皇太子の位から廃された。睿宗帝の第三子李隆基は、後の皇位を奪還する行動の中で功を立てた。改めて皇位に戻った睿宗帝は、皇太子の人選で迷った。李憲は嫡長子であり、かつて一度は皇太子になったことがある。しかし、三子の李隆基は、皇位奪還の行動の中で功を立てている。その時、長子の李憲は皇太子の位を自ら辞退した。睿宗帝は喜び、李憲に物質面からいろいろ援助した。李隆基(後の玄宗帝)は、皇太子になった後、太平公主が政権を廻り、彼と争いが起った。李隆基は政権により、李憲を味方にする必要が生じる。それで、兄弟の情を忘れていないことを証明するために、大きな布団と長い枕をわざわざ作り、兄弟達と一緒に使った。その行為は睿宗帝を喜ばせた。李隆基は皇帝になってから、兄弟の和睦を表わすために、宮中に「花萼相輝之樓」を設立することを命じた。後に、弟の李業の病気の平癒を祝うために、玄宗帝は「棠棣花重満、鶴原鳥再飛」という詩を賦し、兄弟愛を表わした。「棠棣の花」と「鶴鶴」は、すべて『詩経』「常棣」に由来する兄弟和睦のたとえである。臣下はそれを以て、玄宗帝の友悌愛を大々的に誉め称え喜ばせた。

李憲は政治に干渉しないという慎重な態度を最後まで貫いた。それに報え、玄宗帝は李憲に兄弟の情の深さを訴え、『唐

書』にも『旧唐書』にも、玄宗帝が李憲に対しての物質面からの援助を長々と書いている。李憲が没した後、玄宗帝は「高世之行」ありと彼を誉めている。李憲の唯一の「高世之行」と言える行為は、皇太子位を辞退したことである。玄宗帝が彼に送った諡「讓皇帝」からも分かるが、玄宗帝は兄弟の絆を大切にすると、いふよりも、李憲が皇位を譲ったことについて感謝していると言えらる。

以上の考察から分かることは、「花」は、玄宗帝の兄弟愛の象徴となり、その基点は、李憲が皇位を譲ったことにある。

李隆基を推戴する臣下達は、彼のために皇太子位を争い、睿宗帝に進言したとき、「聖庶抗嫡」という言葉を使った。睿宗帝は李隆基を皇太子にする詔の中で「爰符立季之典」(季歴を王として立つ典拠に相応しい意)という言葉を使った。また、李憲が病没した後、玄宗帝は彼を哀悼する文章の中で「能以位讓、爲與太伯」という例えを使った。すなわち、玄宗帝と李憲の兄弟関係を周の季歴と太伯兄弟に喩えることは、唐の皇室及びその臣下の間で、すでに暗黙の了解となったのである。

この考え方に基づき、改めて『初学記』の「田真説話」の改作を見れば、編者は陸機の「三荆」についての本当の典拠(太伯兄弟の話)を意識しているからこそ、その改作を行ったと考えられる。そうでなければ、民間の兄弟についての話に、当時の天子を誉め称える言葉を載せることは、非礼なことであるとも言える。

「三荆」の典拠は、唐の文人たちによって意識的に改作され

たとする仮説のもと、唐の政治事情と合せ、改めて唐代に入つてからの三つの改作段階を分析すると、以下のように考えられる。

李善の『文選注』は、高宗帝李治に進呈した書物である。高宗帝の父、太宗帝李世民は皇太子である兄を殺害し、父に迫つて皇位を譲らせた（玄武門の変）。そのことを憚つて、李善は「三荆」の典拠を「古上留田行」と言い出し、民間の兄弟の話に変えた。その話の内容も、兄が弟を虐める話となつた。

玄宗帝治世の時代となり、玄宗帝の皇位は兄の李憲から譲られたものであり、玄宗帝も兄に対して感謝の意を明確に示した。従つて、開元六年（七一八年）に玄宗帝に進呈した『五臣集注文選』の劉良注では、「三荆」の典拠は、「田真說話」に変更され、兄弟和睦の要を説くように改作を行った。更に皇子たちのための教科書とされる『初学記』の「田真說話」には、玄宗帝が兄弟の絆を重んじる情を誉め称えるために、「花」という要素が加えられたのである。

五、後世における「田真說話」の受容

唐末五代・前蜀の著名な詩僧貫休（八三二年～九二二年）は、詩集『禪月集』（卷一）⁴⁴に、「上留田」という詩作を残している。「父不_レ父、兄不_レ兄。上留田、蝨豎生。徒陟_レ崗、涙_レ嶢_レ。我欲_レ使_レ諸凡鳥雀、盡_レ變_レ爲_レ鶻_レ。我欲_レ使_レ諸凡草木、盡_レ變_レ爲_レ田_レ荆、鄰人歌、鄰人歌。」⁴⁵古風清、清風生。」⁴⁶傍線部と注釈の資料を参照すると、貫休も「田真說話」についての改作事情を読み解けた一人と判断できる。少なくとも、楊炯の「従弟

去盈墓志銘」及び貫休の「上留田」という詩作を見る限り、唐代以降に「三荆」を兄弟の離別を悲しむ意と、「田荆」を兄弟の和睦を説く意に使い分ける傾向が窺える。

「紫荆樹如花如錦、方信春風無淺深。」⁴⁷〔全宋詩〕卷三三五八・陳著四「宜晚小酌二首・其一」。⁴⁸「摩拊紫荆樹、攀緣常棣華。」⁴⁹〔全元詩〕十七・曹伯啓「用賈公儼韻壽何仲礼」。

この二首は「花」、「常棣華」という言葉が見られ、詩意から見ても兄弟和睦を説く詩作なので、『初学記』の「田真說話」から影響を受けたと考えられる。「風吹紫荆樹、色与_レ春庭暮。花落辞_レ故枝、風回返_レ無_レ処。」⁵⁰〔全唐詩〕卷二一七・杜甫「得_レ舍弟消息」。「沙晚鶻鶻寒、風吹紫荆樹。」⁵¹〔全宋詩〕卷三六〇〇・文天祥六「弟第一五三」。「眼前有_レ此紫荆樹、何時重過西州路。」⁵²〔全元詩〕二九・馬祖常「何仲博家棣華堂」。

杜甫、文天祥、馬祖常の詩作に「花」、「鶻鶻」や「棣華」という言葉が見られ、『初学記』の「田真說話」を意識していると判断できるが、詩意から見れば、兄弟の生き別れを悲しむ詩作である。「君家元有紫荆樹、一枝兩枝枯或妍。」⁵³〔全宋詩〕卷三七〇九・陸文圭二「送_レ仲華葛兄」。「悶对亭前紫荆樹、同根那得却相離。」⁵⁴〔全明詩〕卷五六・劉基五「感懷二首・其一」。

「庭前紫荆樹、何日再芬芳。」⁵⁵〔全唐詩〕卷二六一・竇蒙「題_レ弟暨述書賦後」。

この三首は兄弟との離別、或いは死別が詠まれる詩作である。「更笑田家紫荆樹、每随_レ人意_レ作_レ枯榮。」⁵⁶〔全宋詩〕卷二四三八・陳造十七「題_レ椿桂堂四首・其三」。「而況交柯紫荆樹、東枝憔悴西枝榮。」⁵⁷〔全宋詩〕卷三二三〇・高斯得二「讀_レ梅福伝_レ有感」。「不_レ独_レ一斗粟、謡_レ之漢

西都。不_レ独紫荆樹、乃為_二田真_一枯。」(『全元詩』二七・丁復「網魚苗_一図為_二戈伯敬_一題」。この三首はともに李白の「上留田行」を踏まえた詩作であり、唐代の「田真説話」についての改作事情をある程度に理解していたのではないかと考えられる。

平安時代中期の軍記物語である『将門記』には、こう記す。

「或_レ乍_レ生迷_二親子_一而求_二山問_一川。或_レ乍_レ惜離_二夫婦_一而内訪外尋。非_レ鳥暗成_二四鳥之別_一。非_レ山徒懷_二三荆之悲_一。」(『平貞盛等の論功行賞』⁵⁴)。その中に「三荆」は「四鳥」と対の概念として使われているので、陸機の「豫章行」を踏まえたことは明白である。また、夫婦の生き別れに喩えられているので、兄弟の和睦を説く「五臣注」や「初学記」などの注釈書より、離別を悲しむと解釈する『楽府古題要解』(六七〇年〜七四九年の間に成立)関係の注釈書を参考した可能性が高い。

江戸における幕末維新期を代表する漢詩人である大沼枕山(文化十五年(一八一八)〜明治二四年(一八九二))にもこう記す。「紫荆依_レ旧著_二花繁_一、兄弟斯中至_二棠存_一。一樹多情分_レ不得、寧知富貴煮_二同根_一。」(『枕山詩鈔』「三編卷之下・田真兄弟図」)。彼の詩作において「田真説話」が兄弟和睦を説く話と認識され、「初学記」からの影響が強く見られる。

六、おわりに

本稿は南朝・梁の『統斉諧記』の「田真説話」と唐代の類書『芸文類聚』に収録される「荆樹連陰説話」を同じ唐代の類書である『初学記』に見られるテキストと内容の比較をし、「初学記」の「田真説話」の改作事情を明らかにした。まず『芸文

類聚』と『初学記』の「荆樹連陰説話」の本文を比較し、『初学記』は類書として辞書の性格を持ちながら、典拠を忠実に記録するのではなく、読書の皇子たちを想定しながら編集された特徴を指摘した。次に『統斉諧記』と『初学記』の「田真説話」の本文を比較し、『初学記』が「田真説話」に「花」や「兄弟孔懷」という『詩経』の「小雅・常棣」から由来する言葉を加えることを通して、兄弟和睦という要素を取り入れたことを論証した。また、その加えられた「花」についての更なる考察を通して、『初学記』の「田真説話」は玄宗帝の友悌愛を称えるために、臣下によって改作された可能性を提示した。

結論として、西晋・陸機の「豫章行」の「三荆」の典拠は、周の太伯兄弟がお互いに国を譲る話である。唐の政治事情により、李善は高宗帝李治に進呈した「文選注」において、玄武門の変を憚って、「三荆」の典拠を「古上留田行」と言い出し、民間の兄が弟を虐める話に変えた。後に兄に皇位を譲られた玄宗帝の治世に入り、玄宗帝の臣下である劉良たちは進上した「五臣注」の「三荆」の典拠を「田真説話」に変更し、兄弟和睦を説くように改作を行った。更に皇子たちのための教科書とされる『初学記』の「田真説話」には、玄宗帝が兄弟の絆を重んじる情を称えるために、「花」という要素が加えられたのである。

後の『注好選』や『今昔物語集』、嵯峨本『二十四孝』の「田真説話」をはじめ、殆どの写本及び刊本の「田真説話」に「花」という要素が見られる。『楽府古題要解』関係の注釈書から影響を受けたと考えられる『将門記』には、離別を悲しむ

典拠として「三荆」が使われたが、幕末維新期を代表する漢詩人である大沼枕山の詩作「田真兄弟図」から見ると、兄弟和睦を説く『初学記』の「田真説話」は後世に与える影響が大きくなったと判断できる。このように『初学記』は『芸文類聚』と双壁をなす唐代の類書であり、影響力のある書物であったのである。

今後は『初学記』と、中国ですでに逸書となり、日本に残される零本二卷(写本)が国宝に指定されている『珮玉集』との相関関係、「田真説話」の草子物の変遷について、さらに研究を深めていきたい。

注

- (1) 大島建彦氏に「この一編は直接に孝行に関するものとはいえない。」(『御伽草子集』「二十四孝」三三三頁 頭注一一 日本古典文学全集三六 小学館 昭和四九年)、市古貞次氏に「中には田真・田廣・田慶の遺産分配に絡まる話のやうに親孝行談といひ難いものもあるが」(『中世小説の研究』五章二 三三〇頁 東京大学出版会 一九八一年)、黒田彰氏に「荆樹連陰の故事が古来、孝子伝或いは、二十四孝の一とされていることについては(略)聊か理解しにくい面がある。」(『孝子伝の研究』三九三頁 思文閣出版 二〇〇一年)、金文京氏に「田真三兄弟の話は、「二十四孝」に入っているものの、実は親孝行ではなく兄弟愛にかかわる。」(『孝行録』の「明達亮子」について―「二十四孝」の問題点―「汲古」一五 平成元年六月)などの意見が見られる。
- (2) 柳瀬喜代志「『三荆』故事源流考」『学術研究』国語・国文学編第三号 早稲田大学教育学部 一九八二年、黒田彰「孝子伝の研究」思文閣出版 二〇〇一年、徳田進「孝子説話集の研究―二十四孝を中心に―」井上書房 一九六三年を参照。

(3) 原卓志「色葉字類抄における類書の受容」広島大学文学部紀要四四 一九八四年。

(4) 唐・歐陽詢撰『芸文類聚』汪紹楹校 上海古籍出版社 一九九〇年。尚、読解の便宜を図って、一部の資料に字体の変更・傍線・句読点を施した箇所がある。

(5) 唐・徐堅等撰『初学記』巴ノロ 一九六一年。

(6) 高木正一訳註『鍾嶸詩品』(東海大学出版会 一九七八年)に「其源出於陳思」(卷上「上品」・晋 陸機)を参照。

(7) 南朝・宋・劉義慶『世説新語』(目加田誠 新釈漢文大系第七六卷 南朝治書院 一九七五年)に「文帝嘗令東阿王七步中作詩、不成者行大法。応声便爲詩曰、煮豆持作羹、漉豉以為汁。其在釜下燃、豆在釜中泣。本自同根生、相煎何太急。帝深有慙色。」(文学第四・六六)。

(8) 本詩は早くに『世説新語』に見え、曹植自身の作ではないという謂れがあるが、広く流布している。(川合康三『曹操・曹丕・曹植詩文選』岩波書店 二〇二二年 四〇四頁)。

(9) 唐・劉肅撰『大唐新語』(唐宋史料筆記叢刊 中華書局 一九八四年)「玄宗謂張説曰、兒子等欲學綴文、須檢事及看二文体、御覽之輩、部帙既大、尋討稍難、卿與諸學士撰集要事並要文、以類相從、務取省便、令兒子等易見成就也、説與徐堅輩述等編。此進上、詔以初学記爲名」(卷之九 著述第十九)。

(10) 柳瀬喜代志「珮玉集について」『学術研究』国語・国文学編第二五号 早稲田大学教育学部 一九七六年。

(11) 梁・吳均撰『続齊諧記』増訂漢魏叢書叢籍第七一冊 清・王謨輯 乾隆五十七年序刊。

(12) 唐・李善注『文選』(中華書局 一九七七年)の「三荆歎同」株、四馬悲異」林」(卷二八・樂府下・陸機樂府十七首・豫章行)を参照。

(13) 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店 二〇〇七年)に「華」はな。草木の花の總稱。又、特に木に華といひ、草に榮といふ。もとて華に作る。(爾雅、釋草)華、莠也、華莠、榮也、木謂之華、

- 草謂之榮。(説文通訓定聲)(略)開花謂之華、云云、華雖从艸、亦草木之通名矣。」「**花**はな。華・華に同じ。(正字通)花、本作華、俗作華、省作花。草木のはなの總稱。」を参照。
- (14) 『五臣集注文選』景印宋本「卷十四・樂府・豫章行」(梁・蕭統編唐・呂延濟、劉良、張銑、呂向、李周翰注、台北国立中央図書館一九八一年)に「三荆歎、同株、良日、三荆、三枝共本也。昔有田廣田真田慶兄弟三人、將別、無以分。明日欲分、庭有荆樹。荆樹経宿葉黄、乃相謂曰、荆樹尚然、況我兄弟乎。遂不分。荆復悅茂。故云歎、同株。」を参照。
- (15) 『磐溪廿四孝贊』梧溪叢書写本一冊 仙台市民図書館所蔵 国文研函号六三 一六一二。
- (16) 柳瀬喜代志 矢作武『**碧玉集注釋**』汲古書院 一九八五年。
- (17) 宋・李昉等奉勅纂『**太平御覽**』台湾商務印書館 一九六八年。
- (18) 元・胡炳文『**純正蒙求**』江戸出雲寺萬次郎刊 一八〇四年。
- (19) 元・郭居敬『**新刊全相二十四孝詩選**』禿氏祐祥(複製)全国書房一九四六年。
- (20) 馬淵和夫 小泉弘 今野達校注『**三宝絵 注好選**』新日本古典文学大系三一 岩波書店 一九九七年。
- (21) 小峯和明校注『**今昔物語集**』二 新日本古典文学大系三四 岩波書店 一九九九年。
- (22) 『**加言二十四孝**』卷子本一軸 手柄岡持自筆 国文研四孝文庫四一八。
- (23) 国文研の四孝文庫、国立国会図書館、早稲田大学古典籍総合データベースを参照。
- (24) 『**初学記**』卷第十七・友悌第五「**棟華 荆葉**」の条に「**棟華**、毛詩曰、棠棣之華、鄂不韡韡。凡今之人、莫如兄弟。死喪之威、兄弟孔懷。」を参照。
- (25) 石川忠久『**詩経**』新釈漢文大系第一一一卷 明治書院 一九九八年。
- (26) 『**文心雕龍**』(南朝・劉勰著 戸田浩暁 新釈漢文大系第六五卷 明治書院 一九七八年)「**陸機才欲窺深、辭務索広**。故思能入巧、而不制繁。」(卷十・才略第四七)。
- (27) 唐・楊炯撰『**楊盈川集**』上海涵芬樓 江南圖書館藏明董氏刊本 民国年間(一九一二年)一九四八年。
- (28) 清・彭定求編『**全唐詩**』中華書局 一九六〇年。尚、訓詁は大野實之助の『**李太白詩歌全解**』(早稲田大学出版部 一九八〇年)を参照した。
- (29) 李善注『**文選**』の「**三荆歎、同株 古上留田行**」曰。出是上獨西門。三荆同一根生。一荆斷絶不長。兄弟有兩三人。小弟塊摧獨貧。」(卷二八・樂府下・陸機樂府十七首・豫章行)を参照。
- (30) 明・馮惟訥輯『**詩紀**』(聚錦堂藏版 萬曆)の「**古今注曰、上留田、地名也。其地人有父母死不字其孤弟者、隣人爲其弟作悲歌、以風其兄。樂府廣題曰、蓋漢世人也。**」(漢第七、詩紀十七、樂府古辭、雜曲歌辭・上留田行)を参照。
- (31) 『**詩経**』「**小雅・常棣**」の「**脊令在原、兄弟急難**」を参照。
- (32) 宇野精一『**孔子家語**』(明治書院 一九九六年)の「**四鳥説話**」を参照。「**孔子在衛、味且晨興。顔回侍側。聞哭者之声甚哀。子曰、回、汝知此何所哭乎。对曰、回以此哭声非但為死者而已、又有生離別者也。子曰、何以知之。对曰、回聞、桓山之鳥生四子焉。羽翼既成、將分于四海。其母悲鳴而送之。哀声有似於此。謂其往而不返也。回窃以音類而知之。孔子使人問哭者。果曰、夫死家貧。壳子以葬、與之長決。子曰、回也、善於識音矣。**」(卷五・顔回十八)。
- (33) 『**統齊譜記**』の「**田真説話**」を参照。
- (34) 『**分類補註李太白詩**』(一) (卷三・樂府・上留田行・元・蕭士贇注) 芳村弘道解題 尊経閣文庫蔵 汲古書院 二〇〇五年、「**李杜詩通**」(明・胡震亨輯 東洋文庫蔵 永曆四年(一六五〇年)刊本)、「**重訂唐詩別裁集**」(清・沈德潛選 小西山房 清乾隆二八年(一七六三年)序)、「**御選唐宋詩醇**」(清高宗勅選 公益會 清光緒三年(一八七七年)、「**李太白詩歌全解**」(大野實之助 早稲田大学出版部 一九八〇年)などを参照。
- (35) 鎌田正『**春秋左氏伝**』三 新釈漢文大系第三三卷 明治書院 一

九十七年。

(36) 水沢利忠『史記』八列伝一 新釈漢文大系第八八巻 明治書院

一九九〇年。

(37) 吉田賢抗『史記』五世家上 新釈漢文大系第八五巻 明治書院

一九七七年。

(38) 青木五郎『史記』十二列伝五 新釈漢文大系第九二巻 明治書院

二〇〇七年。

(39) 『史記』「卷六一・伯夷列伝第一」の「孔子序列古之仁聖賢人、

如呉太子・伯夷之倫詳矣。」、「卷三二・孔子世家第一」に「太史公曰、孔子言、太伯可謂至德矣。三以天下讓、民無得而稱焉。余說春秋古文、乃知中国之虞與荆蛮句呉兄弟也。延陵季子之仁、心慕義無窮、見微而知清濁。嗚呼、又何其閱覽博物君子也。」を参照。

(40) 「唐睿宗五子列第東都、号五王子宅。時玄宗爲太子、製長杖大被、與諸王共之。後於宮西置花萼相輝之樓、取棣萼安兄弟之義。時一登之、必召與同榻、賦詩宴嬉。世謂天子友侑、古無有者。帝於敦睦天性然也。時有鶴鵠千數集麟德殿庭樹、翔棲浹日」(「純正蒙求」)「玄宗棣華」。

(41) 『唐書』(北宋・宋祁、歐陽修、範鎮、呂夏卿など撰 長澤規矩也解題 汲古書院 一九七〇年)「讓皇帝憲、始王永平。文明元年、武后以睿宗爲皇帝、故憲立爲皇太子。睿宗降爲皇嗣、更册爲皇孫、與諸王皆出閣、開府置官屬。(略)睿宗將建東宮、以憲嫡長、又嘗爲太子、而楚王有大功、故久不定。憲辭曰、儲副、天下公器、時平則先嫡、國難則先功、重社稷也。使付授非宜、海内失望、臣以死請。因涕泣固讓。時大臣亦言、楚王有定社稷之功、且聖庶抗嫡、不宜更讓。帝嘉憲讓、遂許之、立楚王爲皇太子。(略)初、帝五子列第東都積善坊、号五王子宅。(略)玄宗爲太子、嘗製大衾長杖、將與諸王共之。睿宗知、喜甚。(略)天子於宮西、南置樓、其西署曰花萼相輝之樓。(略)帝時時登之、聞諸王作樂、必亟召升樓、與同榻坐、或就幸第、賦詩燕嬉、賜金帛侑飲。(略)世謂天子友侑、古無有者。帝

於敦睦蓋天性然、雖讒邪亂其間、而卒無以搖。時有鶴鵠千數、集麟德殿庭樹、翔棲浹日。左清道率府長史魏光乘作頌、以爲天子友侑之祥。帝喜、亦爲作頌。憲尤謹畏、未嘗干政而與人交、帝亦信重。(略)憲嘗請歲盡録賜目付史官、必數百紙(略)薨、年六十三。(略)帝以憲實推天下、有高世之行、非大号不稱、乃追諡讓皇帝」(「卷八一・列伝第六・三宗諸子・讓皇帝憲」)。

(42) 『旧唐書』(後晋・劉昫等撰 中華書局 一九七五年)「(睿宗)乃下制曰、左衛大將軍、宋王成器、朕之元子、当踐副君、以隆基有社稷大功、人神僉属、由是朕前懇讓、言在必行、天下至公、誠不可奪、爰符立季之典、庶協從人之願。(略)時太平公主陰有異圖。姚元之、宋璟等請出成器及申王成義爲刺史、以絕謀者之心。(略)玄宗嘗製一大被長杖、將與成器等共申友侑之好。睿宗知而大悅、累加賞嘆。(略)玄宗於興慶宮西、南置樓、西面題曰花萼相輝之樓。(略)以爲天子友侑、近古無比。(略)玄宗既篤於昆季、雖有讒言交構其間、而友愛如初。憲尤恭謹畏懼、未曾干讓。時政及與人交結、玄宗尤加信重之。(略)十一月薨、時年六十三。上聞之、号叫失声、左右皆掩涕。翌日、下制曰、能以位讓、爲呉太子。(略)敬追諡曰讓皇帝(略)十數年間、棣華凋落。謂之手足、唯有大哥。(略)業嘗疾病、上親爲祈禱、及愈(略)玄宗賦詩曰、昔見漳濱臥、言將入事違。今逢誕慶日、猶謂學仙婦。棠棣花重滿、鶴原鳥再飛。其恩意如此」(「卷九五・列伝第四五・睿宗諸子」)。

(43) 後に清時代の類書『淵鑑類函』(清・張英「ほか編」 清吟堂 康熙四九年(一七一〇年)序)にある「田真說話(卷二四九・人部八・兄弟・分荆/卷四一六・木部五・荆二・讓分即枯)までも、「初学記」や「五臣注」にあるテキストの傾向を踏襲している。

(44) 陸永峰「禪月集校注」四川出版集團巴蜀書社 二〇〇六年。
(45) 李善注の「古上留田行」を参照。
(46) 李白の「上留田行」を参照。

(47) 『詩経』「小雅・常棣」の鶴鵠。
(48) 「田真說話」を参照。

- (49) 「上留田行」の古今注を参照。
- (50) 李白の「上留田行」を参照。
- (51) 馬辛氏編『全宋詩』北京大学出版社 一九九八年。
- (52) 楊鐮編『全元詩』中華書局 二〇一三年。
- (53) 『全明詩』上海古籍出版社 一九九三年。
- (54) 柳瀬喜代志 矢代和夫 松林靖明校注・訳『将門記』新編日本古典文学全集四一 小学館 二〇〇二年
- (55) 『樂府古題要解』（唐・呉兢撰 国立国会図書館蔵 須原屋新兵衛刊 享保十七年）の「石陸機泛舟清川渚、謝靈運出宿告密親、皆傷離別、言寿短景馳、容華不久」（豫章行）を参照。
- (56) 大沼厚『枕山詩鈔』岐阜大学附属図書館蔵 函号九一九―二八五
- 一九

(ちよう・できび)